

(第3種郵便物認可)

# 光橋

所在地 安曇野市豊科光  
長さ 440m 幅 14.5m

## 犀川に威容 北アの眺望も

『南安曇郡誌』に

国道19号の「光橋東」交差点を西へ折れると、北アルプスの連なりがフロントガラスいっぱい広がった。犀川に架かつて長さ440mの威容を誇る光橋を渡る車は緩やかに左へカーブしながら下り、長野自動車道をぐるボックスへと吸い込まれていく。

よると、この地に木橋が架けられた昭和28(1953)年以前は渡し舟だった。近くに6歳から住む長崎一之さん(86) 豊科光は、若いころ同年配の友人と連れだつて舟に乗り、「川向

こうの」踏入(地区)のお祭りに出掛けた」と懐かしそうに話す。両岸に渡した滑車付きのワイヤを手繰って進む舟で、船頭が詰める小屋もあった。大水に弱かった木橋はやがて鉄とコ

良されたため継ぎ目と橋桁や橋脚の形状が異なり、一部で木の床板もあった。約300mにわたって続く狭い道では、川霧が立ちこめると対向車が見えず「橋の真ん中で立ち往生して大変だった」。長崎さんが教えてくれた。

ンクリートの橋になる。でもまだ幅は狭く、現在の光橋が完成するまで使われたこの旧光橋は、軽自動車ギリギリ1台通れる幅しかなかった。部分改

つ。台座の裏に「県道豊科大天井岳線の開通に伴い、現在地より59メートル南西の社の境内より遷宮する 平成11年3月」と刻まれていた。

「南村神明宮」が建

現光橋の東詰めに

小さな石造りの社殿

が建

た。同社の社員たちは今も定期的に橋

の清掃ボランティアを続けている。

開通式で、橋の北西に位置する重柳

地区の農業・等々力等さん(76)は、

当時89歳だった父親の久

男さんと長男の敦生さん

(46)とともに「3世代

渡り初め」に臨んだ。金

びようぶを背にして夫妻

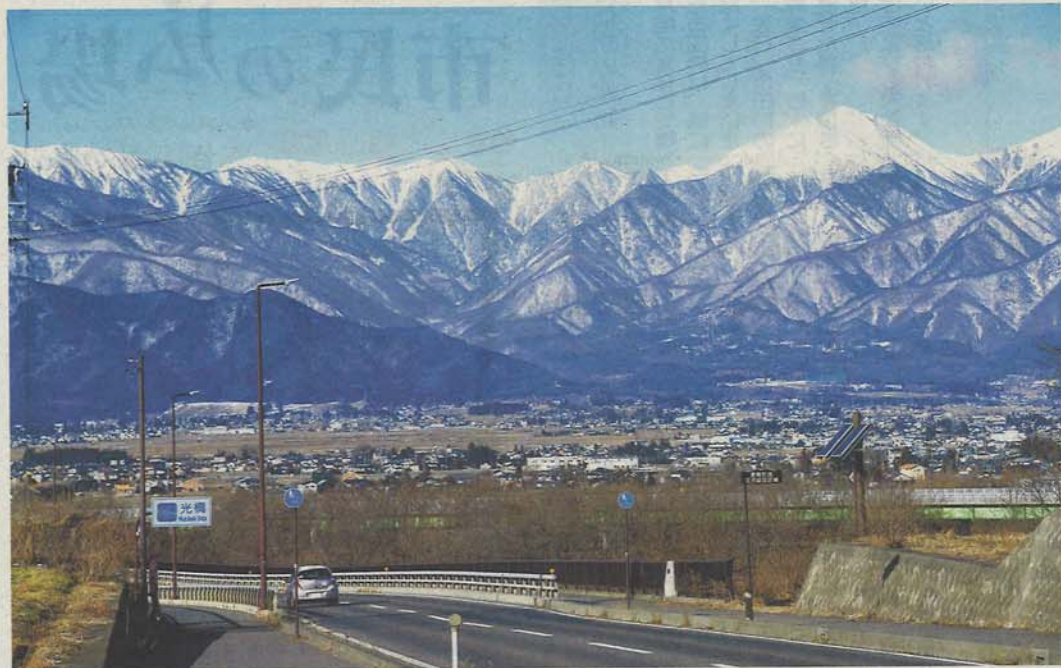
で記念写真に収まる「晴

れがましい日」となっ

た。明科中川手から嫁い

だ妻の良枝さん(72)に

晴れた日には常念岳を中心とした北アルプスの眺望スポットでもある光橋



## 橋のある風景

18

21世紀の幕が開いた平成13年1月、新しい光橋が開通した。橋の設計を担った建設コンサルタント・長野技研(松本市新村)の中嶋孝満さん(60) 安曇野市穂高牧は現在、同社の社長に就いている。豊科町から事業を引き継いだ県の計画で橋が長くなったうえ、7年の阪神・淡路大震災を受けて強度向上が求められ、3度も設計し直した思い入れのある橋だ。大水の心配があつて他所で造った桁を運び込めなかつたため、橋脚の上に設けた屋根付きの箱へと下から資材を揚げ、現地で両側へ少しずつ張り出しながら架設する工法が採られた。「橋の長寿命化が言われるなかで、今後これほど長い橋に携われる機会は少ないだろう。技術者みよりに尽きる」と感慨深げだつ

た。同社の社員たちは今も定期的に橋の清掃ボランティアを続けている。開通式で、橋の北西に位置する重柳地区の農業・等々力等さん(76)は、当時89歳だった父親の久男さんと長男の敦生さん(46)とともに「3世代渡り初め」に臨んだ。金びようぶを背にして夫妻で記念写真に収まる「晴れがましい日」となった。明科中川手から嫁いだ妻の良枝さん(72)にとつて、これまで穂高経由か、一つ上流の田沢川へと回つていた実家までの経路短縮も印象深い。等さんは「長年の念願がかない、不便が解消された地元の喜びは大きかった。(渡り初めは)初めてのなかなかできない体験だった」と振り返っていた。(山本政吉)



犀川の堤防から見上げた光橋。春は橋の上から東側に光城山(ひかるじょうやま)の桜の帯が望める。旧光橋は橋のすぐ下流側に架かっていた



【メモ】橋の名は地元で古くからある地名「光」にちなむ。田沢川の渋滞緩和などを図るため平成元年に豊科町が着手し、7年からは県が担い約52億円の事業費を投じた。安曇野の新しい東西幹線ルートの開通で、筑北方面など東山地域から安曇野の中心部へ通じる交通の利便が高まった。もともとこの木橋が「上川手村が豊科町合併となつて豊科中学への通学道路」(『南安曇郡誌』)として架けられた旧光橋は、改良後も幅が2×2.5mと狭く重量制限もあった。新しい橋の開通に伴い、13年度に取り壊された。